


やましん歌壇掲載歌<第36回>

短歌	平成26年3月～平成31年4月		令和1年5月～	
	掲載短歌	<p>H31年4月：めぐり来る建国記念日新聞に 是非論載りしも遙かとなりぬ：阿部京子選（筆頭一席） &lt;選評&gt;皇国史観で教育を受け、戦後全てを否定されて戸惑った。四大節の一つ「紀元節」を「建国記念日」と変えることに世論沸騰した頃への感慨を詠んだ。</p> <p>H31年4月：核を持つ国が他国へ求めたる 放棄の論理に不条理覚ゆ：大滝 保選</p>	<p>R5年9月：雪溪の融くる流れに手を浸し 十秒間の痺れたのしむ（*）：佐藤幹夫選（筆頭一席） &lt;選評&gt;大きな雪溪の下を流れ出る水の冷たさ、「十秒間の痺れたのしむ」は夏山の醍醐味。下界の猛暑を忘れ、憂き世を忘れて頂上まであと一息なのだろう。</p> <p>R5年9月：ごみを出すわれの先ゆく一匹の あきつに気付く今日広島忌：井上管子選</p>	
共同制作の写真短歌（*）&写真短歌（*）	* * * * * * * * * * * * * * * * * * * *			
作品	短歌	下記の写真短歌の短歌を含めて86首		下記の写真短歌の短歌を含めて118首（令和8年4月まで）
	写真短歌	38作品（自身の作品：37+共同制作：1）		83作品（自身の作品：53+共同制作：30）